

〈特集「比較を超えて——浄土教とキリスト教」——1〉(要約)

神秘・宗教的シンボルシステム・宗教的多様性

ゴードン・D・カウフマン

ペーバーでは、宗教的シンボルの本質とその機能が、現代に生きる人間にとってどのような意義を持っているのかについて論じたが、ここではそれを要約して述べたい。生というものは、われわれに神秘として立ちはだかるものであり、そしてまさにそこにおいてわれわれは自らを理解するということが、このペーバーで述べた内容の文脈となっている。

しかしながら、もし人間がただこの生の究極的な神秘に注意を向けていただけなら、世界中に見られる現代の多くの文化に示されるような非常に複雑な発達を人間存在は成し遂げることはできなかったであろう。すべての文化は、人間自身と世界、そしてそれらのものが直面する問題を描き出し、またそれに対する考えを生み出してきた。そして、地球上で発達してきたさまざまな宗教や文化的伝統の中で、それらのことさらにについてさまざまな異

なった素描と理解が出現した。すなわち、人間存在において何が真実であるのかということについて全く異なった考えが出現した。しかし、さまざまな宗教伝統において「真実」と見なされるようになったものは、「環境——人間」(human-in-its-environment)を描き出し認識する場合の機能であった。そして、そのような象徴的な概念や素描それ自体が、メタファーやイメージ、また更にそれらが文節化される言語の文法やシンタックスによって定義づけられまた形成されていた。

たとえば、仏教とキリスト教における生とその考えを構成するようになった基本的なシンボルの形式は非常に異なっている。仏教における宗教的シンボルの形式は、本質的に本来全体論的なもの(holistic)である。それとは対照的にキリスト教におけるシンボルの形式は基底主義的なもの(foundationalist)である。つ

まり、これらの経験と思考に関する二つの形式の相違によって、両者の方向づけの違いについてかなりの程度説明できる。全体論的、基底主義的といったメタファのそれぞれが、人間がおかれた状況の重要な性質やそこで生が出会う諸問題について、大切な理解を人間に与えてくれる説得力を持った枠組みを醸成させてきた。もちろん、そのような発達はすべてそれぞれの伝統を拡充し拡大している。実際そのような象徴的な根源の微妙の色合いとその深まりによって、キリスト教における罪や救い、また仏教における苦や悟りといった深い洞察や理解が生まれたのである。つまり、それぞれの伝統は、その中心的なメタファとシンボルの推進力によって、時代の中で常に補強されまた深められ、象徴形式が洗練さが増し人間がその問題をより効果的に扱うことを可能にしている。このようにして、偉大な宗教伝統は、人間の生にとっての幅広い洞察や意味そして真実を含む乗り物のように大きくなってきたのである。しかし、いずれの場合も、究極的には、それぞれその歴史の中で獲得してきたメタフォリカルでシンボリカルな根源の上に、「真実である」とされるものは根拠づけられているのである。

このように全体論的なものあるいは基底主義的なものといった言明をなす立場は歴史主義 (historicism) と呼ぶこともできる。このような歴史主義的視点、他の立場のすべてを概観した相対化する絶対的な立場をわれわれに提供するわけではないことを

注意しておくことは大切なことである。逆に、歴史主義は、それ自身が一つのメタファ（この場合は歴史というメタファ）の上に成り立っていることを理解している。したがって、そこで絶対的な主張をなすことは適切ではない。歴史主義はそれ自身が歴史的事であることを理解している。たぶん仏教において、空もまた空とされるものも同様であろう。このような立場は、われわれのさまざまな確信や洞察についてわれわれを謙虚にさせる。なぜならば、われわれは狂信的な確信の衝突が非常に破壊的な大火のようなものとなっている世界と向き合っているからである。

人間の生においてシンボルとシンボリックな世界が果たしているこれらの重要な役割は、とりわけ宗教的な次元において問題を含んでいる。私の考えでは、そのことは仏教の「二諦」と「空」の概念を指標とすることによって何らかのかたちで取り除くことができると思っている。龍樹の「二諦」論は、知識あるいは真実が持つ二つの「次元」における重要な区別を示すものと見なすことができる。すなわち、(a)それは日常の経験や世界（その中にはそれに対する科学的な知識も含まれている）についての普通の（「因習的な」）知識あるいは理解の「次元」、それを「第一の知」と呼ぶことができる。(b)そのような普通の知識の性質や限界についての知識と理解の「次元」、それを「第二の知」と呼ぶことができる。この形而上的知 (meta-knowledge) において、またそれを通してわれわれの第一の知がせいぜい近似的なもの (ap-

proximate) にすぎないこと、しかし日常生活の指針としては役に立つものであることを理解することができる。すなわち、この知は実用性は持っているが、決して形而上学的な妥当性を主張するものではない。われわれのまさに言語と理論にとって本質的な限界性によって、いかなるわれわれの知識（第二の知を含む）も確実性というものを持ち得ないのである。

あらゆる存在と観念についての「空」の論理は、空それ自体（第二の知）も含む、われわれの話や思考や作文が持っている超えがたい限界についてわれわれに警告を発しているものと解釈することもできる。われわれのさまざまな「知識」「空」も含む）は、日常生活においては実用的に役に立つ「近似値」(approximation)を与えるが、われわれはそれらがそのこと以上のものをわれわれに与えてくれるとは考えていない。つまり、これらの龍樹の思想は、すべての宗教的ものの見方が、われわれがその生きている日常世界において重要な指針を求める中でまたそのことを通して生の究極的な神秘と直面することによってシンボリックに構築されるという私の主張とよく似た問題に対して注意を喚起しているのである。

私の考えでは、だれもキリスト教のシンボリックな主題と仏教のそれ、あるいはそのような問題に対する歴史主義的な理解が、生の究極的な神秘を解く特別な鍵となるということを「知る」立場にはないと考える。最終的なあるいは究極的な知恵あるいは真

実はわれわれ人間は持つことができない。したがって、それらのどれ一つとしてそこにわれわれを導くと考えられるものはない。現代の人間の問題において、人間を理解する場合のそのようなさまざまなアプローチから互いに学ぶことは必要である。また同様に、未だその開示する能力が用いられていない他のメタファーやシンボルから、われわれが何か学ぶことも必要である。（嵩満也訳）

（ハーヴァード大学）